
交換と所有

川崎真人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

交換と所有

【Nコード】

N1305T

【作者名】

川崎真人

【あらすじ】

美しい少女というのは、あらゆる人間を等しく狂わせます。その被害者の物語です。

(前書き)

アクセスありがとうございます。

「おいヒロキ。わたしは腹が減ったのである。あの黄色の食べ物を超越せ」

一人暮らしの自分の家でせっせと裁縫などを進めていると、檻の中の緑子がそう言って来た。檻の真ん中で座り込んでいて、あいも変わらず退屈そうにしている。俺はその小さな体に言った。

「もう遅いぞ」

「知ったことでない。わたしが一日に食べるものの全ては貴様が管理している。つまりわたしがこの時間に空腹を覚えるのも、貴様の責任ということになる。貴様はこれをどう受け止める？」

こまっしゃくれたガキに育ったものだと思う。俺はついにやにやして緑子の方を見る。奇跡のように美しい童女。昆虫の羽根を織り込んだような美しいドレスに身を包み、檻の中心で澄まして座るその小さな姿は、さながら囚われの姫のようだった。

この檻もドレスも全て俺が、自作して緑子の為に与えたものだった。美しいものを美しく飾る為に、俺は日夜研究を重ねている。

「……そういや、おまえ前より少し大きくなったな」

こないだ体の寸法を測った時にそう感じたことを思い出した。子供の成長はちょっと想像しがたい程に早い。気がついた時には倍にも四倍にもなって、理路整然とした語り口調で八つも年上の俺をやり込めたりするようになる。これは驚くべきことである。

「ここのところわびしくてならんのだ」

哀れみを誘うように、緑子は俺に向かってそう畳み掛ける。俺は頭を掻きまわった。緑子の健康管理も俺の重要な仕事の一つであり、本来ならば、こんな時間に二度目の晩飯を食わせるなどしてはならないことである。しかし彼女の成長とそれに伴う空腹に気付けなかった俺は明らかに迂闊だ。

「分かったよ」

言うと、緑子は童女の笑みを浮かべた。それは俺が知っている中で最も美しいものであって、これを見るために俺は生きていると言っても過言でもない。そうでもなければ、俺はこいつを部屋で育てたりはしなかっただろう。小さい内にミキサーにかけて捨ててしまつたに違いない。

俺はカレーのカップ麺を作つて来て緑子に渡した。火傷を恐れるような知恵は持ち合わせないで、緑子はその中に手を突っ込み、麺を啜り始めた。

白倉という男がいる。俺の幼馴染で大親友だ。俺はこいつのことが今は好きである。

だがしかしこの男と俺の長い付き合いは、ただただ円満だったという訳ではない。長い付き合いのなかで、俺たちは多くの綻びや確執を抱えて来たし、各々のやり方でそれを解消しながら関係を維持して来た。付き合い始めたばかりの、幼い子供の頃などは特にそうだった。

俺はあいつに色んなものを取り上げられてばかりだった。おやつやらおもちゃやら、子供の大好きなそんなものを。俺はその頃白倉のことが本当に心から憎かった。こんな奴とは一生涯仲良くすまいと、子供心に誓っていた。その誓いは果たされていないが。

そんな時、ある事件が起きた。俺から何でも物を取り上げていた白倉だが、俺のもっとも大切なものを盗みやがった。俺は筆舌に尽くしがたい恐怖を覚え、ピーピー泣きながら喪失感に打ち震えた。床を抱え込んで手が青くなるまでフローリングを叩きまくり、悲痛の叫びを上げ続けた。それほど俺は嘆き悲しんだのだ。

何を奪われたのかは、実のところ覚えていない。とにかく悲しかったという記憶に塗り潰されてしまったのだと、俺は思っている。そして俺は白倉に復讐を誓った。そして白倉のもっとも大切なものを奪い取ってやった。

それは一人の赤ん坊。白倉にできた可愛い妹の、その片割れであ

る。双子に生まれた二人を妹を、白倉は酷く溺愛した。俺はそんな姿を見てきて、これまでの総決算として何か一つのものを取り上げるならば、二人いる妹のうちの一人だと決めていた。二つあるのだから一つくらい良いだろうという、子供らしい釈明もあったりしていた。片割れだけは慰みとして残しておこう、その方が良い戒めになるだろう。

その時に白倉から盗み出したのが、俺の生きがいとなる緑子である。

緑子を盗み出してから、俺はその処遇に困ることになった。緑子は何せ奇跡のように可愛らしい赤ん坊だった。白倉が可愛がるのも良く分かる。俺には緑子を捨てることも壊すこともできなかったし、そのことで大分苦しんだ。共働きの両親にばれないように部屋の押入れで赤ん坊を育て上げる、その筆舌に尽くしがたい労苦こそが、俺の緑子に対する愛情を高めたのかもしれない。

高校生になって、俺は念願通ったの一人暮らしを始めることとなった。俺はそれまでにセーブしていた想像力のことごとくを開放し、檻やドレスを与えて緑子の美しさを強く演出し、思う存分彼女を可愛がった。天へと上るような快感だった。

「ヒロキ。一つ頼みがある」

今日も緑子は檻の中で俺に話しかけて来る。緑子は中で本を読んでいた。読書は大切なことである。俺自身が何かを教えなくても、本さえ読ませておけば色々なことを覚えてくれる。喋り口調がちよっと変になってしまったが、それは致し方がないことだ。

「何かな？」

緑子に着せる第十九番目のドレスの作成する手を止めて、俺は檻の方を振り返った。緑子の頼みなら何でも聞いてやるつもりである。

「友達が欲しい」

緑子は言った。俺は飛び上がるほどに驚いた。

その要求はあまりにも予想外だった。確かに緑子には友達がいな

い。俺以外の人間を、緑子は一人も知らないからだ。緑子はそれに疑問を呈したりしていないし、疑問に感じていたとしてもその疑問さえも当たり前のことに成り果てているはずだった。なので俺は鸚鵡返しにこう言った。

「友達？」

「それがどういうものなのかは知らぬ。だが良いものではあるようだ。よろしく頼む」

夢見る少女のような顔で緑子は言った。俺は緑子に背を向けて、険しい顔で首を一捻りした後で、苦しい声でこう答えた。

「分かった」

緑子が喜ぶ声がした。

俺は思っていた。緑子の友達となる誰かをそこいらから攫って来たとする。そいつが緑子と同じくらいに可愛らしい童女で無い限り、俺はきっとその子のことを酷く虐待してしまうことだろう。そんな姿を緑子の前で見せる訳にはいかない。ならばどうするか。

人形を与えるのである。我ながらナイスアイデアというべきだ。箸の使い方も何も知らない緑子を諫めるには、それで十分というものだ。

「あら兄ちゃん。こんにちは」

デパートのおもちゃ屋で、どの人形が良いかと頭を捻っている時だった。俺に声をかける、天使のような声が聞こえたのは。

「紫子ちゃん。こんにちは」

俺は笑顔でそう言った。紫子ちゃんはそれに笑い返す。彼女は白倉の妹で、緑子の双子の姉に当たる。俺が世界で緑子と同等以上に感じている唯一の存在だった。

「お兄ちゃんはいったい何をしているの？」

紫子ちゃんは大きいだけでなく潤んだ目を上目遣いに、そう聞いてきた。俺も同じ疑問を抱いていたが、先に彼女の質問に答えてあげる。

「人形を選んでいるんだよ」

「人形？」

「ああ。友達が一人もない、とっても悲しい女の子がいるんだ。俺はその子に、友達をプレゼントしてあげようと思うんだ」

「ふうん」

紫子ちゃんは言った。そして

「だったら。あたしがその子の友達になってあげるよ」

そう答えた。俺は思わず苦笑する。

「やっぱり人形の友達じゃ、まずいだろかな？」

「ううん。人形のお友達でも、あたしは別に良いと思うの。だってね、お兄ちゃん、とっても綺麗な人形を乗せたベッドをいつも部屋に飾っているのよ。それでね、これは紫子の大切な妹だ、って、いっつもそう言うの」

「それは本当かい？」

俺が尋ねると、紫子ちゃんは綺麗に微笑んで

「うん。だから人形でも良いと思うの。だけど、その子の友達には、あたしがなったげる」

俺は紫子ちゃんの優しさに、強く打ち震えた。

「何を作っている？」

緑子が俺に聞いた。俺は緑子に似せた人形を作る手を止めて、それに答えた。

「白倉という男がいる。そいつとね、俺は友達を交換しようと思うんだ。このお人形さんを白倉にあげて、別のお友達を白倉からもらうんだ。それが緑子、ぼくからのおまえへのプレゼントだよ」

俺が言うと、緑子はわくわくした声で言った。

「ありがとうヒロキ。とても楽しみにしている」

その言葉を原動力に、俺は人形を作る手を早めた。出来上がったのは俺の最高傑作だった。これなら白倉の奴も文句は言うまい。

そう思い、俺は携帯電話を手にとった。紫子ちゃんをこの家に呼

び出す為だ。

(後書き)

読了ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1305t/>

交換と所有

2011年5月10日12時32分発行